



羽仁吉一

防府市

(1880～1955)



『雜司ヶ谷短信』上巻より

【著作】

『雜司ヶ谷短信』上下巻（昭和31・婦人之友社）
 『我が愛する生活』（昭和60・自由学園出版局）
 『自由人をつくる 南沢講和集』（羽仁もと子と共著）
 （平成3・自由学園出版局）

重要文化財 自由学園明日館

羽仁吉一は、明治後期から昭和の戦後にかけて、ジャーナリスト・出版人・教育者として、それぞれの分野に独自の領域を開拓した先駆者である。

吉一は明治十三年（一八八〇）五月一日、佐波郡三田尻村（現在の防府市三田尻）に生まれた。

華浦尋常小学校卒業後、明治二十三年（一八九〇）頃、私立周陽学舎（現・山口県立防府高校）に入学、ここで豊後日田・咸宜園の広瀬淡窓の流れをくむ今川岳南らの教えを受け、漢学を修めた。同二十六年（一八九三）頃周陽学舎を中退した後、華浦尋常小学校の学友たちと同人誌『学華雑誌』を作ったり、地方新聞に寄稿したりしたと言われている。

明治二十九年（一八九六）三月一日、実業家にして発明家であった柏木幸助を社主とする『防長実業新聞』が発刊、吉一は十五歳でその編集に従事した。

明治三十年（一八九七）頃上京、矢野龍溪（小説家・政治家）のもとで書生となり、強い影響を受けた。同三十三年（一九〇〇）二月、矢野の紹介で報知新聞社へ入社、翌三十四年（一九〇一）一月には二十歳で同紙編集長となった。

この年の十二月、日本初の女性記者（『報知新聞』記者）松岡もと子（本名もと）と結婚。吉一は二十一歳、もと子は二十八歳であった。社内結婚を理由に、吉一は新潟県の『高田新聞』主筆支局長への転勤を命ぜられ、もと子は退社した。

翌年の明治三十五年（一九〇二）五月、『高田新聞』を退社（明治三十六年退社説あり）。一時読売新聞に勤めた後、同三十六年（一九〇三）十月、『電報新聞』編集長に就任している。『電報新聞』は明治三十九年（一九〇六）十二月に『毎日電報』と改称、吉一は同四十年（一九〇七）六月退社した。

これに先立つ明治三十六年（一九〇三）四月三日、羽仁夫妻は雑誌『家庭之友』を創刊している。明治三十九年（一九〇六）四月、『家庭之友』に付随する雑誌として『家庭女学講義』を発刊し、同四十年

（一九〇七）十一月には、妻もと子の弟松岡正男とともに、文芸思想誌『青年之友』を創刊した。

翌年の明治四十一年（一九〇八）一月、『家庭女学講義』を改題し、この時廃刊した『家庭之友』も継承する雑誌として『婦人之友』第一号を家庭之友社から発刊。社名も間もなく婦人之友社と改称し、吉一は妻もと子と協力し、社主として終生その経営・編集の任に当たった。

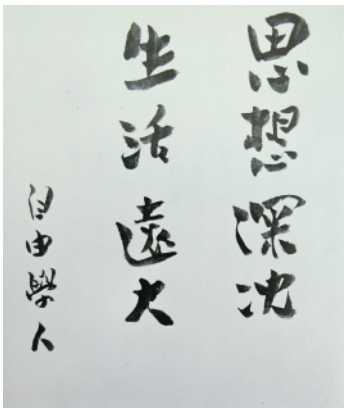
羽仁夫妻は大正三年（一九一四）四月、絵雑誌『子供之友』を、また翌四年（一九一五）四月には少女雑誌『新少女』も創刊した。

そして大正十年（一九二一）四月、夫妻は東京目白に自由学園を創立。西欧のキリスト教的自由主義思想に基づく独自の個性重視教育を開始した。

昭和七年（一九三二）十月、吉一は『婦人之友』に随想『雜司ヶ谷短信』の連載を開始し、戦後の昭和三十年（一九五五）十一月号まで書き続けた。毎号巻末に置かれた、約千字の無署名の随想文である。世に軍国主義の色が濃くなってからも、軍部の圧力を巧みにかわしながら、吉一独自の論調を貫き通した。

昭和三十年（一九五五）十月二十六日、吉一は神奈川県二宮町の別荘友情庵で、心筋梗塞のため急逝した。

（文・森川信夫）



羽仁吉一 座右の書
 （自由学人は吉一の号）
 （『雜司ヶ谷短信』下巻・昭和31年・婦人之友社刊に掲載）